

2014 年度後期 授業評価アンケート結果に対するコメント

—経済学研究科—

経済学研究科長 浅井良夫

授業評価アンケート調査への大学院生諸君の協力に感謝いたします。

昨年度後期の大学院の授業評価アンケートの集計結果を見ると、大学院の授業が一昨年、昨年に引き続き非常に高い評価を得ることができたことは、喜ばしいことだと思います。日頃から、徹底した少人数教育を実施するとともに、院生諸君の勉学意欲を高めるために、種々工夫をしている努力の一端が実を結んだものであろうと考える次第です。

ほとんどの項目において平均値は、昨年度前期を上回っており、「授業への教員の熱意を感じた」という項目では、9割以上の院生が5の評価をつけており、大学院の授業に対する院生の満足度が非常に高いことが窺われます。また、「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した」という項目も、平均4.85という高い評価を得ており、大学院の授業において教員と院生との活発な質疑・応答が行われていることがわかります。このように、双方向の密度の高い授業が行われる好ましい現状を、今後も維持するよう教員は努力して行かねばなりません。

一方で、院生の側の授業への熱意が、依然としてやや低いことにやや懸念を感じます。「予習または復習をよくした」の項目の平均値は4.20と、前期の4.29よりやや低下しました。これは必ずしも低い評価ではありませんが、5の評価をつけた院生が4割にすぎないことは、やや物足りない感じがします。院生のいっそうの奮起を期待するとともに、教員サイドも、院生に自習の重要性を十分に説明する必要があると考えます。

大学院では、院生諸君が専門分野を深く学ぶことが重要であること言うまでもありませんが、今日においては、専門分野に閉じこもるのではなく、幅広い知識や多様な見方を身につけることの必要性はますます増大しています。今後も、大学院では努力・工夫をして、そうした方向に大学院生を向けることができるようにしたいと思います。